



前出の2作品とは趣が異なり、最後はゾーンと静かに不気味さが残る『きつねのはなし』。一乗寺にある古道具屋でアルバイトをする大学生の「私」は使いで、ある古い屋敷に通っていた。店主からは「どんな怪談でももら決して盗す約束をしないで下さい」と釘を刺されていたが……。『私』が産出したものは、そして失ったものは何だったのだろうか。表題作ほか全4編の怪しくも美しい奇譚集。作品の中に登場する吉田神社は、厄除けで知られ、2月には節分祭で賑わう。



『きつねのはなし』

新潮社

吉田神社の境内を抜けて、石段を降りて、長く続く参道を埋め尽くす人の流れの中を歩いていました。

私の傍らに背の高い男の人が立っていて、私と一緒に歩いているのです。その人は、狐の面をつけていました。(p43より)

「しかし君は飲むのう。本当に底が知れんね」

社長さんに言われました。「君、いったいどれぐらい飲むの」私はむんと胸を張ります。「そこにお酒のあるかぎり」(p49より)



『夜は短し歩けよ乙女』

角川書店

「私」が一目惚れした種彦の黒髪乙女。彼女が初めて夜の木屋町から先斗町界隈まで飲み歩くところから物語は始まる。ラム酒をこよなく愛し、「おともだちパンチ」(親指をひっそりと内に隠して、堅く握ろうにも握れない。愛のある拳)をお見舞いするキュートな乙女を追いかける「私」。乙女と「私」が、交互に話していくスタイルをとるラブストーリーだ。京都の花街の一つである先斗町は、鴨川にそった500メートルあまりの縦長い通りで、石畳の路地には店が連なっている。



京都大学を休学中の五回生が主人公。女ウツ気のない生活を送る「私」に彼女ができた。あろうことが断られてしまう。宅配寿司屋でアルバイトし、四畳半の下宿に住み、禁欲的生活を支えるためのビデオ屋をまめにチェック。そして元彼女の研究を続ける。クリスマスイブのことを考えるにつけ思いものが断れ上がる。そんな「私」と友人たちの男汁溢れる日常を描いたデビュー作。森見さんが京大五回生の時にこの作品を執筆した。



『太陽の塔』

新潮社



大学に入ってから三回生までの生活を一言で表現すれば、「華がなかった」という言葉に尽きるであろう。あらゆる意味で華がなかったが、そもそも女性とは絶望的に縁がなかった。(p6より)

書店員も夢中！ 森見登美彦 まだ読んでない人のための

あらすじ&作品舞台紹介

明治の文豪のような文体と思わず吹き出してしまう妄想ワールド。格式の高さと敷居の低さをあわせ持つ森見作品は、目利きの書店員からも支持を集めている。京都に住む森見さんの作品の舞台は、そのほとんどが京都だ。

今宵はやけに賀茂大橋が大きく感じられる。ほんやりしていた私の背中を、神様が叩いた。「よし。これから橋を渡れ」(p59より)



『四畳半神話大系』

太田出版

主人公は四畳半に暮らす大学生。新入生には、サークル勧誘のピラがとかく押しつけられるが、「私」が興味を持ったのは、映画サークル「みそぎ」、「弟子次郎」という奇想天外なピラ。ソフトボールサークル「はんわか」、そして輪廻転生・縁起物屋の4つだった。大学生活への期待を胸にサークルを選択するが……。4つの物語が「旅行世界」として描かれる路線絶頂の作品。高野川と賀茂川が合流し鴨川となる地点に架かる賀茂大橋では、悪友との珍騒動が巻き起こる。最後は奥内ハンバーグを食べたくはす。